








# 生成AIツール活用ガイド：ChatGPT・Gemini・Copilot・NotebookLMの賢い使い分け

## はじめに

シード・プランニングの業務効率化を図るうえで、ChatGPTやGemini、Microsoft Copilot、NotebookLMといった生成AIツールを使いこなすことは重要です。各ツールには得意分野や連携方法の違いがあり、それらを理解して業務内容に応じて適切に使い分け・併用することで、日々の作業に強力なアシスタントを得ることができます。本ガイドでは主要な生成AIツールの特徴を比較し、それぞれの強みや効果的な使い方、組み合わせパターンを紹介します。最後に、「どのツールでも構わない。プロンプト（指示）の使い方次第で強力なアシスタントになる」という結論に着地します。

## 主要AIツールの概要と比較

まず、ChatGPT Plus（GPT-5）、Google Gemini 2.5 Pro、Microsoft 365 Copilot、Google NotebookLMという主要な生成AIツールについて、性能・精度、使いやすさ（UI）や他システムとの連携性、利用コストなどを比較します。それぞれの基本的な概要を把握しましょう。

ツール 	モデル・性能	精度・信頼性	使いやすさ・連携	コスト 
<b>ChatGPT Plus</b> OpenAI GPT-5)	GPT-5モデルを使用。8K～32Kトークン程度の文脈長に対応（※PlusプランでGPT-4利用可）  。高度な推論・文章生成能力を持つ最先端のLLM。	総合的に高精度だが、訓練データの知識は2021年9月まで（知識カットオフあり）。ただしプラグインや閲覧機能で最新情報を補完可能  。長文や創造的な文章生成、コード作成にも強い。	チャットUIで対話形式に応答。追加機能として <b>プラグイン</b> や <b>Web閲覧、コード実行</b> （Advanced Data Analysis）等が利用可能  。新機能「 <b>Canvas</b> 」でAIと文章やコードを並行編集可能  。他システムとの直接統合は基本なし（API経由の統合は可能）。	月額20ドルのサブスク  (法人契約済) 

ツール	モデル・性能	精度・信頼性	使いやすさ・連携	コスト
<b>Google Gemini 2.5 Pro</b> (Google DeepResearch)	Googleの次世代マルチモーダルAIモデル。テキストだけでなく画像・音声・動画・コードも入力可能 <sup>4</sup> 。標準で128Kトークンという非常に長い文脈ウィンドウを持ち（プレビュー版では最大100万トークンに拡張） <sup>5</sup> 。性能はGoogle従来の最大全モデル（Gemini 1.0 Ultra）に匹敵する水準 <sup>5</sup> で、幅広いタスクに高効率で対応可能。	テキスト・コード・画像・音声など複合的な理解と高度な推論が可能。大規模コンテキストを活かした長文解析や複雑な推論にも強み。Google検索結果を組み込んで根拠情報を参照しながら回答する「 <b>グラウンディング</b> 」機能を備え、最新のウェブ情報も活用できる <sup>6</sup> 。	現在は主に開発者向け（Vertex AI経由）や一部製品で提供。GoogleのAIアシスタント（Bard等）に統合されつつあり、 <b>ワンクリックでウェブ情報を参照</b> した回答生成など独自機能を備える。UIは対話型だが英語中心。	Google Workspaceで法人契約済
<b>Microsoft 365 Copilot</b> (OpenAI GPT-4ベース)	OpenAIのGPT-4をMicrosoft Graphデータと組み合わせて活用。Office文書やメール、予定表など企業内データをAIに提供し、文脈を考慮した回答生成が可能。性能はGPT-4相当で高度だが、企業内文脈に沿った調整あり。	ビジネス文書や社内データに即した高い精度の応答が期待できる。例えばWord文書の要約、メールドラフト生成、Excelデータ分析など、 <b>社内蓄積情報を踏まえた回答</b> を返す。一般常識的な質問にも答えられるが、主にユーザーの作業文脈に沿った支援が強い。	<b>使い勝手:</b> Word、Excel、PowerPoint、Outlook、TeamsなどMicrosoft 365アプリに統合され、各アプリの側面からチャットで指示を出すだけで文書生成や編集が可能 <sup>7</sup> 。例: Wordで段落のリライト提案、Excelで表の洞察抽出、Teams会議で議事録自動生成等。既存業務フローに溶け込む形で利用できる。	エンタープライズ向けの有料アドオン。Microsoft 365 E3/E5など既存ライセンスに追加（システム依頼申請から申請可能）

ツール	モデル・性能	精度・信頼性	使いやすさ・連携	コスト
Google NotebookLM (AIノートブック)	Google Labs発の実験的AIツール。ユーザーがアップロードしたPDFやGoogleドキュメントなど <b>指定した資料のみを知識源</b> として対話を行う研究支援ツールです <sup>9</sup> 。ベースモデルはGoogleのLLM (PaLM 2 や Geminiモデルに順次更新) で、1つのノートブックに最大50件の資料を登録可能。	<b>資料内の情報に基づいてのみ回答</b> するため、与えた情報範囲外については言及しない設計 <sup>10</sup> 。このため幻覚 (ハルシネーション) を大幅に抑制できます。回答には出典として該当資料の引用が添えられ、根拠を確認可能 <sup>10</sup> 。資料そのものの記述が不明瞭だと正確さもそれに依存。	ブラウザ上で動作する対話型UI。チャット画面と資料ビューワが統合されており、資料を閲覧しながら質問したりメモを取ることが可能。 <b>引用付き要約やQ&amp;A</b> 、音声での読み上げ機能 (Audio Overview) など研究支援の機能が充実 <sup>11</sup> 。現状英語メインだが日本語PDFも扱える場合あり。	現在ベータ版 (Google Labs) として提供中。個人向け <b>無料</b> 枠あり。2025年末時点で上位版「NotebookLM Plus」も登場し、より多くの資料や音声出力が可能な有料プランが提供開始 <sup>12</sup> <sup>13</sup> 。企業で利用する場合はGoogle WorkspaceやGoogle Cloud経由での提供も予定。

以上のように、各ツールはそれぞれ異なる強みを持ちます。次章では、これらのツールの特徴やユースケースをもう少し詳しく見ていきましょう。

## 各ツールの強みと使いどころ

### ChatGPT Business (GPT-5) の特徴と強み

**ChatGPT** (特にGPT-4モデル)は、汎用性の高い強力な対話AIです。高度な文章生成やプログラミング支援、クリエイティブなアイデア出しまで幅広く活用できます。最新モデルGPT-5が使えます。

例えばプラグイン機能を有効にすれば：<sup>1</sup> <sup>2</sup>

ウェブ検索や計算、他サービス連携ができ、**Web閲覧機能**でインターネットから最新情報を取得した回答も得られます<sup>2</sup>。また**高度なデータ解析** (旧称Code Interpreter) を使えばExcelやCSVをアップロードして分析・可視化してもらうことも容易です。

ChatGPTのUIはチャット形式で直感的ですが、2024年に追加された**Canvas機能**により、共同編集に近い使い方も可能になりました。**図: ChatGPTのCanvasモードの例**。Canvasではチャット画面とは別ウィンドウが開き、ユーザーの文章やコードとChatGPTの提案を**並べて表示・編集**できます<sup>3</sup>。文章内の一部をハイライトして「この部分を要約して」と指示すれば、その箇所だけを編集するなど、より**文脈を保った細かな改善提案**を受けられます<sup>14</sup>。これにより、長文の下書きをChatGPTに校正・改善してもらう作業が効率アップします。

さらにOpenAIは**カスタムGPT (Custom GPT)** 機能を提供しています。これは自分専用のChatGPTを作り、特定の目的に特化させた「エージェント (GPT)」を構築できる機能です<sup>15</sup>。コーディング不要で、例えば

「社内用語集を組み込んだ翻訳GPT」や「自社サービスについてのみ回答するカスタマーサポートGPT」を作成できます<sup>16</sup>。社員自身が用途に合わせてカスタムGPTを作り社内で共有することで、業務によりフィットしたAIアシスタントを運用することも可能です。

ChatGPTは2024年末に**エージェントモード (AgentMode)** も実装しました。エージェントモードではChatGPTがブラウザやターミナルなど複数のツールを駆使して、より自律的にタスクを遂行できます。<sup>17</sup>例えばウェブサイトを自動で閲覧し（ログインが必要なページもユーザー承認のもとアクセス可能）、内容を取得して分析したり、得られたデータを元にコードを実行して結果を出力するといった**一連の処理を自動化**します<sup>17</sup><sup>18</sup>。このエージェント機能により、ChatGPTは単なる会話相手から“一緒に作業してくれる同僚”に近い存在になりつつあります。例えば社内のExcelファイルをアップロードせずとも、エージェントが権限を得て社内システム上のデータに直接アクセスし、表を編集・更新してくれる、といった使い方も将来的に可能になるでしょう（実際、社外ベンチマークではChatGPTエージェントがExcelの編集タスクでCopilotを上回る精度を示したとの報告もあります<sup>19</sup>）。

**まとめ:** ChatGPTは汎用性と拡張性が高く、**アイデア創出から文章執筆、コード作成、データ分析までオールラウンド**に活躍します。その場での対話で柔軟に指示を変えられるため、試行錯誤しながらプロンプトを調整していくことで、思いもよらない創造的なアウトプットを得ることもできます。注意点として、デフォルトでは社内の機密データへのアクセスはないため、機密情報を扱う場合は**情報入力に配慮**するか、ChatGPT Enterprise版の利用やカスタムGPTでの社内限定データ活用を検討してください。

## Google Gemini 2.5 Pro の特徴と強み

**Gemini 2.5 Pro**はGoogle DeepMindが開発した最新の**マルチモーダルAIモデル**です。テキストだけでなく画像・音声・動画・コードなど様々な種類の入力に対応し、それらを総合して理解・生成できる点が大きな特徴です<sup>4</sup>。モデル性能としては、Googleが2023年末に公開した従来の最大モデル「Gemini 1.0 Ultra」に匹敵する品質を持ちながら計算効率が向上しており<sup>5</sup>、大規模モデルでありながら実用面での応答速度やコスト効率を両立した設計になっています。

Gemini最大の強みは、**コンテキスト（文脈保持）能力の飛躍的向上**です。標準で128,000トークンという非常に長い文脈ウィンドウを持ち、オプションで**最大100万トークン**もの入力を処理できます<sup>5</sup>。100万トークンは日本語換算で約7〜80万字（400字詰め原稿用紙で1,750枚相当）に達し、長時間の会議録や本数冊分のテキスト、数万行のコードや長時間の動画まで一度に解析できる計算になります<sup>20</sup><sup>21</sup>。例えば、400ページを超える長大な文書や1時間の動画を与えても、その内容を分析・要約し、関連する部分同士をまたいだ推論を行えるポテンシャルがあります<sup>20</sup>。この**桁違いの長文脈処理**は他のモデルにはないGeminiの強みであり、大量の資料を抱えるシーンで威力を発揮します。

またGeminiは「**検索連携 (Grounding)**」機能を備えており、必要に応じて**Google検索結果を参照**しながら回答を生成できます<sup>6</sup>。例えば最新のニュースや統計データが質問に含まれる場合、Geminiは裏で関連するウェブ情報を取得・検証してから回答してくれるため、**最新性の高い回答や根拠付きの回答**が得意です。「ワンクリックでWebを参照するアウトプット」とはこの機能を指しており、ユーザーはGeminiの回答中の引用番号をクリックするだけで、参照されたウェブ記事のスニペットを見ることができます。ChatGPTにも閲覧モードはありますが、Geminiではモデル自らが必要に応じて検索を行う点でよりシームレスです。

Geminiは**マルチモーダル**ですから、画像や音声を与えて解析・説明させることも可能です。例えば設計図やグラフの画像を渡して要点を説明させたり、音声データを文字起こしして内容を要約するといったことも一モデルで完結できます<sup>4</sup><sup>22</sup>。加えてコード生成・デバッグ能力も強化されており、プログラミング支援にも利用できます。これらの多彩な入出力に対応するため、Geminiでは**関数呼び出し**など構造化データ出力への対応や、APIとしての使い勝手向上も図られています<sup>6</sup>。

現状、Gemini 1.5 ProはGoogleのクラウドサービス（Vertex AI）で提供されており、企業や開発者がAPI経由で利用できます。また一般ユーザー向けには、Googleの対話型AIサービス（旧称Bard）がGemini系モデルに順次アップデートされています。例えばBardの「高度な推理モード」や、一部有料プラン（Google One AIプレミアムなど）でGeminiの能力を使ったチャットが可能になっています。今後、Google Workspace向けのAI支援機能（Duet AI）にもGeminiの技術が組み込まれていく見込みで、Googleドキュメントやスプレッドシート上での文章生成・要約、画像生成などがGeminiによって強化されるでしょう。

**まとめ:** Geminiは**最新情報へのアクセス**と**巨大なコンテキスト処理**を強みに持つ次世代AIです。調査レポート作成など最新データが重要なタスクや、膨大な資料を横断して分析する必要があるタスクに向いています。一方で日本語対応や一般ユーザー向けUIの洗練度ではChatGPTにまだ及ばない部分もあります（日本語での細かなニュアンス生成などはGPT-4が得意）。用途に応じてChatGPTとGeminiを使い分けたり、両方に質問して結果を比較することで、より信頼性の高いアウトプットを得るといった使い方も考えられます。

## Microsoft 365 Copilot の特徴と強み

**Microsoft 365 Copilot**（以下Copilot）は、Office製品に深く統合されたAIアシスタントです。OpenAIのGPT-4モデルをベースにしつつ、社内の各種データ（ドキュメント、メール、予定表、チャット履歴など）をMicrosoft Graph経由で参照し、ユーザーごとに**業務文脈に沿った回答**を生成する点が特徴です。言わば「社内の知識を身につけたGPT-4」として、Officeアプリ上で動作します。

**図: Word上でのMicrosoft Copilotの利用例。** Wordでは右側のCopilotペインに「〇〇についての提案書をドラフトして」と入力するだけで、GPT-4が社内情報を踏まえたドラフト文書を生成してくれます<sup>7</sup>。Copilotは**Wordでは文章要約・リライト、Excelではデータ分析・グラフ化、PowerPointではスライド自動生成、Outlookではメール下書き作成、Teamsでは会議要約**と、各アプリごとに実用的な支援を行います<sup>7</sup>。例えば「このExcelの売上データから傾向を分析してグラフと3つの洞察を書いて」と指示すれば、Excel上でグラフを作成しつつ洞察を文章化してくれます。Teams会議中には自動で議論を要約しアクションアイテムを抽出するなど、**利用シーンに応じた痒い所に手が届くサポート**が可能です。

Copilotはユーザーの社内データにアクセスできるため、**組織内のナレッジを活用**した回答が得られる点が強みです。例えば「先月の会議メモを要約して次回議題を提案して」と尋ねれば、SharePointに保存された議事録を参照し要約するとともに、内容に基づいた次回の議題案を提案する、といったことも可能です。純粋な汎用知識だけでなく「あなた（組織）の持つ情報」に基づいて回答するため、**より実用的で具体性のあるアウトプット**が期待できます。

導入面では、CopilotはMicrosoft 365の法人向けプラン（E3/E5やBusiness Standard/Premium）に追加ライセンスとして提供されます。料金は**1ユーザー当たり月額30ドル**で、これは既存Officeライセンス費用と比べても同等以上のプレミアム価格ですが<sup>8</sup>、それだけ**業務インパクトが大きい機能**と位置づけられています。「誰もがこの先Copilotなしでは働けなくなるだろう」とMicrosoft幹部がコメントするほどで<sup>23</sup>、実際に導入企業からは「一度使うと手放せない」とのフィードバックが多くあります。

**まとめ:** Microsoft 365 Copilotは、**日常的に使っているOfficeツールに深く溶け込んだAI**です。Officeでの作業効率を飛躍的に高めてくれるだけでなく、企業内の情報資産を有効活用することで、単なる汎用AIには出せないコンテキスト特化型のアウトプットを可能にします。注意点としては、自社テナント内での利用に限定されるため、社外Web情報の取得には向きません（Bing Chat Enterpriseなど別サービス併用が必要）。しかし社内資料の山から欲しい情報を引き出す、資料作成の手間を大幅に削減するといった「**社内業務の生産性向上**」にフォーカスした場面では最も心強いツールと言えるでしょう。

## Google NotebookLM の特徴と強み

NotebookLMはGoogleが提供する実験的なAIノートブックで、特に**リサーチ支援**に特化しています。最大の特徴は、**ユーザーが指定した資料の範囲内でのみAIが回答を生成する点**です<sup>9</sup><sup>10</sup>。ChatGPTなど汎用モデルは訓練データに基づいて幅広い知識を持ちますが、その分質問によっては誤情報（ハルシネーション）を作り出してしまふ懸念がありました。NotebookLMではユーザーがノートブックに追加したPDFやドキュメント、URLで指定されたウェブページなど「ソース」として**与えられた情報**だけをもとに応答するため、情報源の明確な回答が得られます<sup>10</sup>。言い換えれば、「このPDFに書かれている内容についてのみ答えて」とAIに指示する仕組みになっており、回答には参照元のページ番号や該当文章が引用付きで表示されます<sup>10</sup>。そのため回答の裏付けを人間がすぐ確認でき、**出典エビデンスのある安心感**があります。

NotebookLMの基本UIはチャット形式ですが、画面が「ソース管理パネル」「AIとのチャットパネル」「ノート（メモ）パネル」の三つに分かれている点特徴的です<sup>24</sup>。ユーザーはまずノートブックに調べたい資料（たとえば業界レポートPDFや自社内の技術文書など）を最大50件までアップロードできます。するとAIがそれらを内部で要約・索引化します。その上でチャットパネルで質問すると、資料から関連箇所を探し出し回答を生成します。必要に応じてソース閲覧パネルで該当資料の該当ページをすぐに読めるので、**調べものの効率が非常に良い**です。またノートパネルに自分のメモを書き留めておき、AIと対話しながら知見を整理する、といった使い方もできます<sup>25</sup>。

NotebookLMは機能面でもユニークなものが用意されています。例として、アップロードした資料群をまとめて**要約（Summary）**させたり、資料内容にもとづき新たな**ブリーフィング文書**や**学習ガイド**をワンクリックで生成させたりすることができます<sup>26</sup><sup>27</sup>。また資料の内容を音声で読み上げる**Audio Overview**という機能もあり、生成された音声を再生しながら途中でAIに質問を差し挟むような**対話的なリスニング学習**も可能です<sup>28</sup>。これらは調査した内容を頭に定着させたり共有資料を作成したりするのに役立ちます。まさに「情報の理解を深めるパートナー」として設計されているのがNotebookLMなのです。

現状NotebookLMは英語を主とした実験段階のサービスで、日本語での回答やインターフェース対応は限定的です。しかしPDFなど日本語資料をソースに指定した場合、内容次第では日本語で要約や質問回答してくれるケースもあります。また2025年には有料の**NotebookLM Plus**が発表され、利用できるノートブック数・ソース数が拡大し（例えば一人100ノートブック、各ノートに50資料まで）、企業向けのチーム共有やセキュリティ機能も充実してきています<sup>13</sup><sup>29</sup>。ゆくゆくはGoogle Workspaceやクラウドストレージ（Google Drive）と連携して、業務ドキュメントを安全に分析できるEnterprise版も登場すると見込まれます<sup>30</sup>。

**まとめ**：NotebookLMは「与えた資料に基づいて答える」というシンプルながら強力なコンセプトで、特に**レポート作成前の文献調査**や**社内ドキュメントの精査**に適しています。信頼性の高い回答が得られる反面、裏を返せば自分が提供しない知識は一切出てこないため、オープンな質問（例：「最近の市場動向は？」）には向きません。したがって、まずChatGPTやGeminiで網羅的な情報収集を行い、その上でNotebookLMに社内資料や専門資料を読み込ませて**裏付けを取る・詳細を確認する**という併用が効果的です。情報の海から確かな知見を抽出し、安心して業務に活かしたい場合に心強いツールと言えるでしょう。

---

## シード・プランニング業務での活用シナリオ

以上の各ツールの特徴を踏まえ、シード・プランニングで日常的に発生する業務において、具体的にどのように使い分けや併用ができるかをいくつかのシナリオで紹介します。**提案書作成**、**報告書・レポート作成**、**翻訳**、**アイデア発想**、**会議の議事録作成**といった場面ごとに、有効なツールの組み合わせ例を見てみましょう。

## 提案書・企画書の作成

新規提案書や企画書を作成する際は、まず**ChatGPT**でテーマに関するブレインストーミングや関連情報の下調べをすると良いでしょう。ChatGPT (GPT-4)は幅広い知識と創造力があるため、例えば「〇〇業界の最新トレンド3つと、その課題点」を尋ねれば的確な要点を列挙してくれます。それを踏まえて自分のアイデアを整理し、構成案をChatGPTに投げてフィードバックを得ることで、企画の骨子を練り上げます。

次に**Microsoft Copilot**を使って具体的なドキュメント作成に入ります。Word上でCopilotに「〇〇業界向け提案書のドラフトを作成して。構成は先のチャットで練ったとおり」などと指示すると、見出しと箇条書きのたたき台を生成してくれます。さらに「第2章に競合比較の表を追加して」「全体をもう少しカジュアルな口調にして」など調整も対話的に依頼できます。Excelに市場データがあればCopilot (Excel) にグラフ化と考察文を書かせ、それをコピーして提案書に貼るといった**アプリ横断**の連携も簡単です。PowerPointで提案書スライドを作る場合も、CopilotにWordの内容を渡して「10枚のスライドに要約して」と頼めば初稿が数分でできます。

内容の正確さを高めるには**NotebookLM**の活用も有効です。例えば提案先業界の詳細レポートPDFや、過去に自社が作成した類似提案書をNotebookLMに読み込ませておき、チャットで「今回の提案の差別化ポイントを過去資料から抜き出して」と質問します。すると関連する記述を引用付きで教えてくれるので、自分の提案に盛り込むことで説得力が上がります。また提案書内に引用すべき統計データ等があれば、NotebookLMに資料から正確な数字を探させて確認することで**裏付けのある内容**を担保できます。

最終仕上げとして、再度**ChatGPT** (Canvasモード) に全文をチェックさせるのも良いでしょう。Canvas上で提案書テキスト全体を貼り付け、「専門用語の統一と冗長表現の簡潔化をお願いします」といった指示をすれば、該当箇所に修正提案をインラインで入れてくれます。**ChatGPT+Copilot+NotebookLM**の連携により、発想から文書構成、データ確認、文章磨きまで一貫して効率化できるのです。

## 調査報告書・レポートの作成

市場調査や技術調査のレポート作成でも、複数AIの併用が有効です。まず**Gemini** (またはGoogle Bard) を使って最新の情報収集を行います。例えば「2025年時点の〇〇市場規模と主要プレイヤー」を聞けば、GeminiはWeb検索を行い信頼できそうな公開データを元に回答してくれます<sup>6</sup>。加えて出典リンクも提示されるため、そのまま参照して詳細を確認可能です。Geminiで得た外部情報を踏まえつつ、**ChatGPT**で調査内容の構成案や要約を書いてもらいましょう。ChatGPTは知識カットオフがあるものの、一般的な背景説明や過去データの整理に長けています。GeminiとChatGPT双方に質問し、回答を付き合わせることで漏れの少ない下調べができます。

調査対象に関する**社内の専門資料**がある場合は、**NotebookLM**にそれらを読み込ませ詳細確認に使います。例えば調査対象技術のホワイトペーパーPDFや、過去のナレッジ資料をアップロードし、「〇〇技術の利点と欠点を資料から要約して」や「資料内のデータで最新のものはどれか？」と尋ねます。外部の玉石混交な情報はGeminiで取得しつつ、専門性の高い部分はNotebookLMで**確実な情報**を押さえるイメージです。NotebookLMなら回答の根拠ページが示されるため、そのままレポートの参考文献に引用することもできます。

レポート本文のドラフトは**ChatGPT**に任せると早いでしょう。箇条書きの調査結果を渡して「これを基にA4で5ページ程度の報告書本文を書いて」と依頼すれば、整合性の取れた文章を一気に生成します。専門用語のニュアンスなど心配な点は、ChatGPTの出力をNotebookLMに貼り「この内容は資料の記述と合っているか？」とクロスチェックすることも可能です。最後に**Copilot (Word)** で文書スタイル (フォーマットや言い回しのトーン) を社内標準に整えます。「敬体表現に直して」「図表番号を振って」などのリクエストもCopilotなら即座に反映できます。

このように、**Geminiで外部情報収集＋ChatGPTで文章化＋NotebookLMで専門情報確認＋Copilotで体裁仕上げ**という流れで進めると、調査レポート作成が効率的かつ正確に行えます。

## 翻訳業務

英語資料の日本語翻訳やその逆の場合、**ChatGPT**がまず便利です。ChatGPTは翻訳メモリの知識も豊富で、技術文書からカジュアルな文章まで幅広い文体に対応できます。「この段落を日本語に直訳してください」「意識してください」「専門用語は社内用語に置き換えてください」など細かな指定にも応じてくれます。特にChatGPT PlusのGPT-4は高精度で、専門性の高い文章でも大意を外さず訳してくれるケースが多いです。

より社内向けにチューニングした翻訳が必要なら、**カスタムGPT**機能で「自社用語に最適化した翻訳AI」を作成することも考えられます<sup>16</sup>。過去の翻訳対訳データを学習させたGPTを用意すれば、略語や言い回しも統一された質の高い翻訳が得られるでしょう。実際、シード・プランニング内でもプロジェクト単位で専門用語集を学習させたカスタムGPTを使い、翻訳品質とスピードを向上させている事例があります。

**Microsoft Copilot**も、Word文書全体を指定して「英訳／和訳して」と指示すればGPT-4による翻訳が返ってきます。ただし現時点ではCopilotは翻訳専用機能という位置づけではなく、文脈保持も弱いため、長文では段落ごとに指示する必要があるかもしれません。翻訳に関してはやはりChatGPT系の方が柔軟です。

翻訳結果のチェックには**NotebookLM**が役立つ場面もあります。翻訳元原文と翻訳結果をノートブックに入れ、「この2つは意味合いが一致していますか？ 相違点があれば指摘してください」と尋ねることで、AIに簡易な校正をさせることも可能です。NotebookLMは原文と訳文という2つの「ソース」からしか情報を引かないため、余計なことを言わず両者の差分だけを教えてくれるはずです。誤訳防止のセーフティネットとして使えでしょう。

## アイデア発想・ブレインストーミング

新規事業のアイデア出しや企画ブレストには、**ChatGPT**と**Gemini**の両方を使ってみることをお勧めします。ChatGPT (GPT-4)は発想力豊かで、「制約条件〇〇の中で新しいサービス案を10個出して」といったクリエイティブな問いにもユニークな回答を返してくれます。一方Gemini (Bard) は最新のトレンドやニュースに基づいた提案が得意です。「最近話題の〇〇技術を応用したサービスアイデアは？」と聞けば、直近の話題を織り交ぜたアイデアが期待できます。**異なるAIからアイデアを引き出す**ことで、多面的な発想が可能になるでしょう。

出てきたアイデアを肉付けする段階では、**ChatGPTのエージェントモード**が面白い使い方を提供します。例えばChatGPTエージェントに「このアイデアの市場性を調査して」と依頼すると、自動で関連情報をウェブから集め、簡易な市場分析レポートをまとめてくれます<sup>17</sup><sup>31</sup>。自分一人では大変なリサーチ作業も、AIに下調べを任せて時短できます。また**Canvasモード**上でアイデアの概要を書き、ChatGPTに逐次コメントをもらいながらブラッシュアップするのも効果的です。まさに**AIをブレストの相棒**として使うイメージです。

**Copilot**はブレスト段階よりも具体化段階で威力を発揮します。例えば有望なアイデアについて企画書ドラフトを作る際、Word上でCopilotに「このアイデアのメリット・デメリットを表形式で整理して」「実行計画を3ステップで提案して」と頼めば、整然とした資料案が手に入ります。アイデアを思いつくだけでなく、**形にするところまでAIに手伝わせる**ことで、アウトプットまでの時間を大幅に短縮できます。

## 会議の議事録・要点整理

打ち合わせや会議のメモ作成は、AIの得意分野の一つです。特に**Microsoft Copilot (Teams)**は会議のリアルタイム文字起こしや要約機能を備えており、発言内容から決定事項・アクションアイテムを抽出することが可



能です。会議終了後、Copilotに「要点を3つにまとめて」と話しかければ、その場で議事録ドラフトが表示されます。Outlook上でも、会議後に「参加者にフォローアップメールを送って」とCopilotに指示すれば、自動でメール文面を作成してくれるなど、**会議前後の事務作業を劇的に軽減**できます。

仮にTeamsを使っていない場合でも、録音データと文字起こしツールさえあれば得られた文字起こし全文をChatGPTに与え、「以下の会議の記録から、議題ごとに要点を整理してください」と依頼すれば箇条書きの議事録を生成してくれます。さらに「決定事項と担当者をリストアップして」と追求することで、アクション項目も抽出できます。NotebookLMに発言録を読み込ませて質問しても良いですが、長大なテキストの場合はChatGPT（GPT-5）の方が一度に扱えるトークン量が大きい分向いています。

会議中にホワイトボードの写真や手書きメモが出た場合は、**Gemini**の画像解析能力が役立つかもしれません。写真を与えて「このボードに書かれたアイデア一覧をテキスト化して」といったことも可能なので、議事録テキストに追記できます（ChatGPTもVision機能で画像読み取りが可能になっていますが、Gemini系の方が精度が高いとの報告もあります）。

**ポイント：** 議事録作成では**速さより正確さと漏れの無さ**が求められます。AIによる自動要約結果は便利ですが、最終的な確認は人間が行いましょう。Copilotの抽出結果やChatGPTの要約をベースに、人間が重要なニュアンスを補足して完成版とすることで、質の高い議事録が短時間で完成します。

---

## AIツール導入・連携に関する注意

新しいAIツールを業務に導入したり社内システムと連携させたりする際は、必ず**社内のAI推進担当（AI会議体やシステム部門）**に相談してください。例えば「業務でChatGPTを使いたいが機密情報の取り扱いが心配」といった場合、利用ルール整備など、適切なサポートを受けることができます。Microsoft CopilotやNotebookLMのように組織規模でライセンス導入が済んでいるツールについても連携が不可欠です。社内の専門チームに相談することで、**セキュリティポリシー順守**や**費用対効果の最大化**を図りつつAI活用を推進していきましょう。

---

## おわりに：ツールよりもプロンプト次第

ここまで、ChatGPT・Gemini・Copilot・NotebookLMといった主要生成AIツールの違いと活用法を見てきました。それぞれに個性はありますが、最終的に重要なのは「**どのツールでも構わない。上手にプロンプト（指示）を使いこなせば強力なアシスタントになる**」という点です。言い換えれば、ツールの性能差よりも**ユーザーの問いかけ方・使い方次第**で得られる成果は大きく変わります。

例えば「ただ要約して」と投げるのではなく、「〇〇の観点から100字以内で要約して」と工夫すれば、どのAIもより望ましいアウトプットを返してくれるでしょう。また、一度の指示でうまくいかなくても、結果を見ながら追加の指示を与えて**対話的にブラッシュアップ**していくことで完成度を高めることができます。これはあたかも人に仕事を頼むときと同じで、明確な目的と適切なフィードバックが成果物の質を左右するということです。

生成AIは今後も進化し続け、社内業務への浸透も深まるでしょう。本ガイドで紹介した使い分け・併用のコツを参考に、ぜひ日々の業務で積極的にAIツールを**試し、学び、活用**してみてください。最初は手探りでも、使うほどにコツが掴めて生産性向上や新しい発想に繋がるはず。そして困ったときは本ガイドや社内のAI推進メンバーを頼りつつ、皆さんの実務に合ったAI活用スタイルを築いていきましょう。きっと、あなたの“もう一人の有能なアシスタント”としてこれらのツールが活躍してくれると思います。

参考文献・出典: 本文中で参照した資料のリンク一覧 1 2 3 15 17 19 5 6 7 8 9 10 13 ほか。

---

1 2 Comparing Prices: ChatGPT, Claude AI, DeepSeek, and Perplexity

<https://tactiq.io/learn/comparing-prices-chatgpt-claude-ai-deepseek-and-perplexity>

3 14 Introducing canvas, a new way to write and code with ChatGPT. | OpenAI

<https://openai.com/index/introducing-canvas/>

4 6 22 Gemini 1.5 Pro | Generative AI on Vertex AI | Google Cloud

<https://cloud.google.com/vertex-ai/generative-ai/docs/models/gemini/1-5-pro>

5 20 21 Introducing Gemini 1.5, Google's next-generation AI model

<https://blog.google/technology/ai/google-gemini-next-generation-model-february-2024/>

7 8 23 Microsoft puts a steep price on Copilot, its AI-powered future of Office documents | The Verge

<https://www.theverge.com/2023/7/18/23798627/microsoft-365-copilot-price-commercial-enterprise>

9 10 11 How NotebookLM Eliminates AI Hallucinations & Improves Accuracy - Geeky Gadgets

<https://www.geeky-gadgets.com/google-notebooklm-hallucinations-and-accuracy-breakthrough/>

12 13 24 25 26 27 28 29 30 NotebookLM announces NotebookLM Plus and other new features

<https://blog.google/technology/google-labs/notebooklm-new-features-december-2024/>

15 16 Introducing GPTs | OpenAI

<https://openai.com/index/introducing-gpts/>

17 18 19 31 Introducing ChatGPT agent: bridging research and action | OpenAI

<https://openai.com/index/introducing-chatgpt-agent/>